

宮津城の変遷

宮津城跡は、宮津市鶴賀^{つるが}に所在し、宮津湾に面した大手川河口部に築かれた近世の平城^{ひらしろ}です。本丸と二の丸は明治維新の廢城により、城の痕跡をとどめておらず、市街地化されています。しかし、三の丸や城下町については、江戸時代以来の町割りを残しており、現在の地名や堀跡などから江戸時代の絵図と対比することができます。

宮津城は、天正8（1580）年に細川藤孝によって築造され、慶長5（1600）年の関が原の戦いの前に自ら宮津城を焼き払い、田辺城（舞鶴市）に籠城し、西軍の兵力の一部を足止めしたと伝えられています。この功積により細川氏は九州（豊前国）に封じられました。



宮津城の絵図（宮津市教育委員会提供）

その後、田辺城には京極高知が入り丹後国を支配し、晩年、宮津城に移り大規模に改修しました。

京極高知が元和8（1622）年に死ぬと、宮津藩主となった京極高広により城の再整備がおこなわれ、寛永2（1625）年に近世の城として造り替えられ、完成したとされています。

近年の調査では、

三の丸南西隅部で見つかった石垣は、江戸時代に描かれた絵図にも残る枡形虎口を構成する遺構で、石側の南北端に土塁が取りつく構造に復原できます。この枡形虎口が築かれた時期は、京極氏が丹後に入った直後の可能性があります。



宮津城の現風景

三の丸南西部では、屋敷地を画する石垣が見つかりました。出土遺物の年代からは細川期のものではなく、慶長5年に京極高知が丹後に入った時期に築かれた可能性があります。また、この石垣を埋める大規模な改変が行われたのは、京極高広が藩主になって城下の整備をおこなった元和8（1622）年から寛永2（1625）年の間と考えられます。発掘調査によって、初期の宮津城の遺構は、比較的短期間に改変を繰り返していることがわかりました。



三の丸南西隅の枡形虎口の石垣

（村田和弘）